

再び、インド植物紀行記

清水 建 美

T. Shimizu : The Second Report on my Botanical Trip to India

私は植物分類学・地理学を専攻しており、なかでもハウセンカ類（*Impatiens* 属）は主要な研究対象の一つである。ハウセンカ類は、インドには特に種類数が多く、しかも、本属2亜属のうち、両者ともにあるのはインドとスリランカだけである。こんなことから、長らくインドの *Impatiens* 探査を念願していたが、幸なことに昨夏は、日本学術振興会（JSPS）の特定国派遣研究者に採用され1987年に続きインド行が実現した。専門的な話はさておいて、ここでは今回のインド植物紀行雑話を綴ってみたい。

1. インド科学アカデミー

JSPS の特定国派遣研究者制度は、相手国の関係学術機関との一定の同意の下に相互に研究者を派遣し、学术交流に資する制度である。インドの対応機関はインド科学アカデミー Indian National Science Academy（略称、INSA）、滞在期間は短期（2ヶ月）と長期（10ヶ月）の2通りと決められている。私は付加期間を含め6月下旬から9月中旬までの3ヶ月間滞在した。

当然のこととはいえ、インドでは日本流ではないさまざまな事柄に遭遇した。まず、INSA からの受入れ通知が発予定期間まで届かずいらさせられたし、漸く届いた通知は JSPS あての一本のテレックスに並んだ名列一枚だったことに驚かされた。INSA はヤムナ川に沿ったデリーの目抜き通り Bahadur Shah Zafar Marg にある。特定国派遣研究者には、滞在費1日 175 Rs（ルピー、1ルピーは12円）のほか、宿泊費や研究上の交通費実費が支給される。私はデリー到着翌日に早速 INSA に出向いたが、すでに61日分の滞在費と帰国時の空港使用税が用意されていた。国内旅費のうち航空券は事前に支給、宿泊費や交通費は旅行後に支給されるとのことで、旅行の前後には必ず INSA へ出頭した。

ところでこうした諸経費の支給については、宿泊費に関しては領収証を要求されたが、旅費については市内の三輪車やヒマラヤ山中の借馬の費用に至るまで申告すれば、証拠書類なしでサイン一つで即刻 O.K. であった。何ともおおらかで迅速な事務処理のしかたかと、わが国での大学の旅費支給の手間ひまを思い出しながら、感心したものであった。おお

らかといえば、滞在終了後、研究報告書を提出しようかと申し出たところ、担当官のサニー博士（コムギの育種の専門家）は、“それは JSPS に提出して下さい。インド滞在は貴方の研究にお役に立ちましたか” とにこやかに尋ねたのが、唯一の研究成果に対する質問であった。こうした INSA の厚意に報いるべく、現在、私は論文のとりまとめを急いでいる。

2. インド東北地方——メガラヤへ

インド東北地方はアルナチャル・プラディッシュ、アッサム、ナガランド、マニプール、ミゾーラム、トリプラそれにメガラヤの各州からなる飛地的な地方である。四周は中国、ブータン、ビルマ、バングラディッシュに囲まれ、軍事的にも sensitive な地域であるといわれ、この地方に足を踏み入れるためには、特別入国ビザが必要である。そこで Ministry of Home Affairs にビザを申請するのであるが、アッサムの州都ゴハティやメガラヤ州のシロンなどの都市部はともかく、田園地帯や山地帯へ出向くとなれば、ふつうにはビザは発給されない。ビザ取得のために東奔西走してくれたのは、ここでも INSA であった。関係機関に INSA のスタッフとともにほとんど連日、1週間余も足を運び、ビザが入手できたのは出発予定日の前日であった。

1960年以降、日本の植物研究は、ヒマラヤや東南アジアに拡がり、10数次にわたる調査隊が送り込まれている。しかし、インド东北部には、このような政治的事由のためか少なくとも日本の植物分類学者が入ったという話はきかない。私がめざしたのは、メガラヤ州の Khasi Hills であった。

メガラヤには、まずデリーからブラマプトラ河畔のゴハティに飛ぶ。デリーからはバグドグラ経由で約3時間の航程である。INSA からの指令でゴハティ空港には東北丘陵大学 Northeastern Hill University（NEHU と略称）からのスタッフが出迎えに出てくれていた。NEHU はメガラヤにおける私のホスト研究機関でここでは10日余りの滞在中、専用のジープを提供してくれ、宿泊費・食費はすべて大学負担という優遇ぶりであった。

ところで、ゴハティ空港には外国人の入国をチェ



写真1. NEHU の Tripati 教授夫妻

ックするために、特別警察（SP）が私服で眼を光らせている。私の場合はなぜかチェックなしで出構できたが、帰途には案の定、物腰やわらかな訊問を受けた。出迎えの人もこのチェックのことは知らなかった様子であるが、こうした事情は事前にわきまえておけば、全く戸惑うことはなかった。

さて、ゴハティから NEHU のあるメガラヤの州都シロンまでは車で3時間半のドライブの道のりである。ゴハティは海拔 230 m、デリーではみないココヤシ・アレカヤシなどの並木が育ち熱帯多雨の気候を思わせる。南下するほどに次第に高度を上げ、Khasi Hills に至る。Khasi Hills は、海拔 1000～2000 m、なだらかな起伏が波状に続く一大丘陵地帯であり、世界有数の多雨地として知られ、とくに、シロンの南にある小村チラブンジーは世界最大の降雨地であり、年間10mを越すという。シロンの町はずれには、日本から移入した見事なスギの並木が大量の降雨量に支えられて育っていた。

植生からみれば、Khasi Hills は元来照葉樹林帯である。ところが、今ではところどころの谷筋にわずかにその名残りを止めるのみ、林といえばカシー、マツの松林ばかり、見渡す限りの草地が広がる——そんな景観がそこにはあった。ところで、イギリスの J. D. Hooker 卿が 100 年も昔に植物探査をおこない、20数種の *Impatiens* を記録している。Khasi Hills の本格的な植物調査はこの Hooker 以来未だに出ていないが、私が当地を植物探訪の目的地に選んだ理由は、この *Impatiens* の豊富さにあった。しかし、期待は裏切られ、雨降りしきる10日間の調査行で確かめ得た *Impatiens* は漸く12種、Hooker のみた種のせいぜい半数であった。100年間の自然の変貌のしからしむるところだと、NEHU の友人たちと語り合った次第である。

3. 植物調査とハーバリウム

メガラヤ州シロンには、インド植物調査所 Botanical Survey of India（略称、BSI）の東北支部がある。BSI はインドのフロラ調査のための国立研究機関であり、今世紀の初頭に発足、カルカッタに本部を、シロンのほか北部のウッタル・プラデッシュ州のデラ・デュンと南部のタミル・ナードゥ州のコインバートルに支所をもつ。ちなみに、インドには自然調査のための他の機関、インド動物調査所（ZSI）とインド地質調査所（GSI）がある。参考までに、BSI の本部カルカッタには 200 万点の標本を擁するハーバリウム——国立中央植物標本館がある。各支部にもそれぞれ相当数の標本をもつハーバリウムがあることはいうまでもない。

私は、東北支部のワードワー所長の依頼で標本検定のために2、3日、BSIに通った。BSI はイギリスのキュー植物園との連繋の下で仕事を進めており、キュー常駐のリエゾンオフィサーをもつが、ワードワー所長は5年間にわたるリエゾンオフィサーの勤務を終え、昨年4月この東北支部に着任したばかりである。しかし、同氏はここ数年の間にインド東北部各州の新しいフロラを出版するのだと意気込みを熱っぽく語ってくれた。事実、19世紀後半、Hooker 卿は、「インド植物誌、全7巻」（1872～1897）の大著を出し、これは今なおインドのフロラの基本的文献となっているが、アルナチャル・プラデッシュ州やナガランド州などはほとんど手つかずの状態だという。

それにしても、国を挙げて現在なおハーバリウムを充実させつつ、自国のフロラ——つまり植物資源の調査を営々と進めていく国の方針は、植物分類学者にとってまことに羨ましい限りである。分類学が生物学の基礎であり、資料科学である以上、標本館（植物の場合、整理・保管・研究の機能をもつものをハーバリウムという）の確保とその充実が欠かせない。昨今は、遺伝子資源の保全やその探索のための情報源として重要な役割を課せられている一方、植物分布のデータベースとしてまた形態学・細胞学・成分分類学・DNA 分類学のための証拠試料の保管場所として生物科学を支える重要な役割を果たしている。そうした時代的要請とも相まって世界各国ではよそおいを新たにして、ハーバリウムの充実に余念がない。たとえば、オーストラリアでは10年ほど前、フロラやフォーナ調査のための政府機関ができて、国家的事業として新しい「オーストラリア植物誌」が続刊中であるし、お隣の中国では1984年、

北京郊外香山に中国科学院所属の7階建の大ハーバリウムができ、専用バス数台で送迎するほどの大スタッフを抱えて活動している。前述のキューやバリーの植物園には、それぞれ、600万点という規模を誇るナショナル・ハーバリウムがある。こうした世界の趨勢にもかかわらず、わが国の文教・大学行政では遂にナショナル・ハーバリウムはできず、日本最大の東大植物園や東大資料館両者併せても120万点の標本をもつにすぎない。それにしてもこのような基礎科学に対するわが国の文部行政の処遇は、いかにも日本的である。最近、ある科学雑誌に次のような指摘があった。日本の科学研究に対する投資は他国に比べて決して劣るとは言えないが、未だにそれなりの国際的な評価を受け得ないのは、基礎科学をおろそかにする国家的風潮が国際的信用を失わせる結果をもたらしているためだと。誠に同感である。

現在、環境庁の事業の一つとして、都道府県別のフロラ作りが進められているが、基礎的具体的なデータはすべて地方の植物研究者に依存しているにもかかわらず、これらのデータ提供者には何らの報酬も払われていない。わが国では、目に見える技術料は高価であるが、目に見えない基礎的な知識はタダ同然なのである。

インドの印象をいま一つつけ加えておこう。私は、今回の滞印中、ジャンム・カシミールの首都スリナガルにカシミール大学を訪ねたが、ここでは1981年、植物学部から植物分類学センター Centre of Plant Taxonomy が独立した建物として充足し、小さいながらも2人の専従の植物分類学者、3名の研究補助員をもった完全なハーバリウムとして活動中である。私の所属する金沢大学理学部には現在175m²の別棟のハーバリウムがあるが、発展・充実されるどころか、ハーバリウムの面積は規準面積外としては認められず、大学移転を目前にしてせいぜい15万点ほどの標本ですら、保管場所の確保に頭を悩まさねばならない。これが経済大国日本の現情なのである。

4. 南インドへ

インドの国立研究機関といえば、南インド・パンガロールのインド国立科学研究所 Indian Institute of Science (略称、IIS)を忘れるわけにはいかない。ここには、緑あふれる実に広大なキャンパスに生態学センター Centre for Ecological Sciencesをはじめ、バイオテクノロジーからロケット工学に至るまで、科学のあらゆる分野(25部門)を網羅した一大研究所がある。私の世話をし

て下さったのは、生態学センターの面々であったが、ここには C. J. Saldana 教授の主管になる西ガート山脈のコレクションからなるローカル・ハーバリウムがある。私は、早速教授とともに標本や文献を検討した上、調査行のルートを決定、8月下旬、西ガート山脈に向けて出発した。西ガートとは、デカン高原の西縁を占める高地で、海拔1000~2000m、一帯は照葉樹林帯であり、茶の産地としても有名である。この高地の小都市ウータカムンドは、ニルギリ茶で知られるニルギル・ヒルにある。そして、ニ

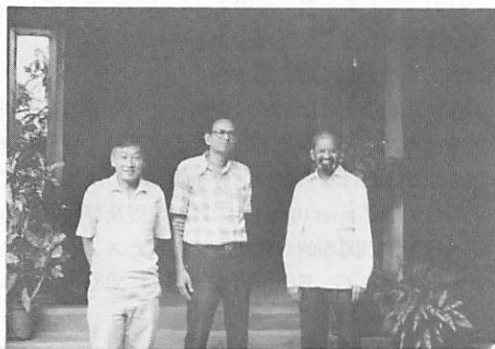


写真2. IIS の Saldana 教授(右)と Bobyn 教授(中央)と筆者

ルギル・ヒルの一角には、ユネスコの人間と生物圏計画(MAB)のためのニルギリ生物圏保護区 Nilgiri Biosphere Reserve があり、IISの生態学センターによって管理されている。私は、西ガートの山々で10日余りを過ごしたが、この自然保護区では野生のゾウやクジャクを目撃することができ、探し求めていた *Impatiens* Subgen, *Acanlimpatiens* の面々にもお目にかかることができた。

今回の滞印期間中、INSAを始めインド各地で大学や研究機関から暖かい援助を頂いたが、関係各位にはこの誌面を借りて改めて厚く御礼を申し上げたい。

(本稿は、科学随筆誌「蟻塔」に投稿したものを収録した)

〔植物ニュース〕 132. ヒメタケシマランの黄熟品 *Streptopus streptopoides* (Ledeb.) Frye et Rigg 1988年9月21日に、金峰山の針葉樹林内で黄熟している本種を見た。黒熟するクロミノヒメタケシマランは記載されているが、黄熟するものは、記載がないようなので、キミノヒメタケシマランとでもしたらと思う。(今井建樹)